

# A Study of Sentence Fragments: Direct Generation in Parallel Architecture

永次, 健人

<https://hdl.handle.net/2324/2235996>

---

出版情報 : Kyushu University, 2018, 博士 (文学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

## 論文内容の要旨

本論文では、省略の一種である文断片を取り上げ、三部門並列モデルに基づく文断片の直接生成分析を論じる。文断片とは、一つの単語や句により構成されながら文に相当する解釈を持つ言語表現のことで、疑問文に対する簡略応答に代表される。生成文法では、省略表現一般に対して、完全な文の一部を削除することで派生されるという見方が主流であるが、文断片についても、これに従い、文断片は発音されないレベルで文構造を持ち、削除操作によってその表層形が派生されるとする削除分析が標準的な分析とされてきた。しかし、削除分析には理論的にも経験的にも問題があることがこれまでに指摘されている。特に、文断片では文では見られない文法現象が観察され、削除分析への反証とされてきた。削除分析への代案としては、文断片は抽象的な文構造を持たず、発音されるままの形で生成されるとする直接生成分析が様々な研究者により提案されている。直接生成分析は直感的に自然であり、経験的にも妥当に思えるが、これまでの直接生成分析の議論は削除分析への批判が中心になっており、文断片の特性をどのように説明するかは十分に論じられてこなかった。文断片が文構造を持たないとすると、なぜそれにもかかわらず文相当の解釈を持つのか、また、文断片で見られる文法現象はどのように説明されるのか、という二つ疑問が生じる。これらの疑問に答えを与えることが本研究の目標の一つとなる。

本研究のもう一つの目標は、直接生成分析を支持する経験的議論を拡充することにある。文断片には40年以上の研究史があるが、データの蓄積は不十分である。文断片の統語的研究はこれまで英語を中心としており、通言語的な調査がまだまだ求められている。本論文では、英語だけでなく、日本語、韓国語、トルコ語、ドイツ語、フランス語からのデータを提示し、直接生成分析への証拠を示す。

本論文は以下のように構成されている。1章では本論文の概要と意義を述べ、2章では、削除分析と直接生成分析を概説する。2章の前半では、削除分析の一般的な想定を見た上で、それらが省略現象一般および文断片において成り立たないことを示す。2章の後半では、従来の直接生成分析の代表的な研究を取り上げ、それらの成果を見た上で、限界を指摘する。直接生成分析の先行研究では、文断片が文とは文法的に特性が異なることが示されており、特に、Progovac (2006) は文断片には時制またはTPが欠如していることを指摘している。本論では、Progovac (2006) の一般化に従い、文断片はTPより小さい構成素であると想定する。これまでの直接生成分析の提案の多くでは、文断片の意味と文法的認可において、実質的に、先行文に依存するメカニ

ズムが仮定されていたが、これが経験的にも理論的にも妥当ではないことを論じる。

3章では、先行研究で削除分析の経験的証拠として挙げられてきた事実を批判的に検討し、直接生成分析を支持する経験的な議論を行う。具体的には、文断片における格現象、英語の再帰形の認可、NPI/NCIの認可、島の制約、終助詞、WH疑問文解釈について、直接生成分析の立場から分析を与える。格現象については、文断片では文とは異なる格の出現パターンが見られるが、これは文断片が（抽象的なレベルでも）文構造を持たないことが原因であることを論じる。再帰代名詞の認可については、self代名詞の文断片は文中と比べて制限が緩く、束縛条件Aのような局所性条件の対象になっていない。このことは、直接生成分析の下では、Reinhart and Reuland (1993)らの一般化を想定することにより予測される。NPI/NCIについては、主に、日本語の「WHも」と「XPしか」に注目し、これらの文断片の振る舞いが削除分析の下で予測されるとする先行研究への反論を提示する。島の制約については、Merchant (2004)やNishigauchi (2006)の主張に反し、文断片が島の制約により制限されないことを示す。終助詞付きの文断片については、Yim (2012)による韓国語のデータを用いた削除分析を支持する議論を批判し、日本語の終助詞を用いた直接生成分析を支持する証拠を提示する。最後に、文断片がWH句を伴わずともWH疑問文の解釈を持つことを示して、このような例が削除分析の下では予測できないことを論じるとともに、情報構造に基づく説明を提案する。

4章では、Jackendoff (1983, 2002 他)の三部門並列モデルにおける省略現象への一般的アプローチを提示し、その下で文断片の意味解釈と文法現象が説明されることを示す。初めに、三部門並列モデルを概説した後、このモデルに基づくCulicover and Jackendoff (2005)の省略現象へのアプローチを導入し、その欠点を指摘する。彼らのアプローチを改良し、三部門並列モデルに基づく新しい枠組みを提示して、この枠組みの下で3章で扱った経験的事実を分析し直す。5章は結語となる。